

## 曾祖父の月

加古川市立氷丘中学校 三年 宮崎 純大

「宮崎、前へ！」

上官のその言葉と同時に、私は隊列から一步前へ進んだ。続けて、命令の言葉が向けられる。その内容は、いちばん近くにいる部隊への伝令であった。私のいた部隊は負傷者も多く危機的な状態にあったので、何とかして助けを求めなければならぬ。いちばん近く、といっても、実際にどれくらい離れているのかは分からない。通信機器の不具合のため、連絡を取り合うことがまったく出来ずにいた。

上官は言う。あの星の方向へ、ただひたすらに走れ。そのうちに味方の部隊と遭遇するだろう。夜が明けると敵軍に見つかる可能性が高くなる。辺りが暗いうちに、必ず辿り着くように。

一瞬の戸惑いも許されない。「はい！」という大きな返事とともに水筒をひとつ肩から提げ、私は上官の言った星に向かい走り出した。仲間の励ましの声が背中に届いたが、部隊でいちばん足の速い私へのこの任務は、大いに心細く、夜の闇をさらに深くさせた。

どれくらいの時間、どれくらいの距離を走ったか。見上げると、月だけはきれいだった。その月に気を取られ、沼に足を取られた。バランスを大きく崩した私は、そのまま沼へ倒れこんだ。幸いにもその沼は深くなかったのですぐに起き上がることが出来たが、最初に口をついて出た言葉は、

「しまった、煙草が！」

何よりも大事にしていた煙草が台無しとなり、私は走る氣力を失った。もはや歩くことすら面倒だ。しかし、命令である。煙草が乾くことを願いつつ、私はまた、走り出した。あの星はまだずっと遠くにあるようだった。

これは僕の父が、僕の曾祖父から聴いた、先の戦争での体験談である。

僕は生まれて間もない頃、曾祖父に抱っこをしてもらったことがある。当然記憶にはないのだが、父の話によると、抱っこをされた僕は笑顔になったらしい。曾祖父の思い出は、僕にはない。だからよりいっそうに、父から聴いた戦争での話を、直接

聴きたかったという思いは今でも心にある。

曾祖父がひととき光る星を目指して走る姿を、僕ははっきりと想像することが出来た。どれだけ怖かっただろうか。何もないただ暗い道を進むだけでも、僕なら怖い。敵軍の存在を頭に置きつつ、定かとは言えないゴールに向かってただひたすらに走る。そのさなか、曾祖父は月を見上げた。

月はただ空にあって、人間の営みを静かに見ている。月が見るいまの日本の状況は、戦争や戦闘に直接参加していないという点で、ひとまずは平和と言えるのかも知れない。僕たちはこのまま成長をして大人に近づき、こんな大人になりたい、大人になったらこんなことをしたいという夢や希望を持つことが出来る。しかし世界情勢の変化などから、これから先のことは誰にも分からない。

歴史は繰り返す、という言葉がある。戦争の歴史はこれ以上、繰り返してはならないはずだが、いま現在も戦争や紛争に苦しむ人たちが、僕よりも年若い子どもたちを含めて数多くいる。戦争というあまりに悲惨な状況にあるとき、人は誰もが無力だと思う。小さなひとりひとりに出来ることは何もない。未来や夢や、明日への希望が、消えてしまう。

曾祖父は父に、月だけはきれいだった、と言った。夜空の輝きに心を打たれるのは、人間にしか出来ない。極限の状況にありながらも、月を見上げ、美しいと感じ、その記憶を孫である父に伝えた僕の曾祖父。

僕が今夜見る月は、そして明日見る月は、どんな月だろうか。

曾祖父の勇気と心を誇りに思いつつ、平和を願い、一日一日の時間、家族や他の人のいのち、そして自分のいのちを大切にしながら、僕もつよく生きたい。